

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農薬使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

# 農作物技術情報 第4号 水稻

発行日 平成24年 6月28日  
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部  
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)

携帯電話用QRコード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます  
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

- ◆ 6月25日現在、水稻生育は平年より4日程度の遅れと見込まれ、茎数の増加もやや遅れています(特に沿岸部)。
- ◆ まだ目標茎数に達していない圃場では、分けつ発生を促す浅水管理を続けましょう。すでに目標茎数を確保した圃場では、すみやかに中干しをしましょう。
- ◆ これから幼穂形成期や減数分裂期など低温に弱い時期を迎えます。幼穂形成期頃から徐々に深水管理を開始しましょう。
- ◆ 斑点米カメムシ類の増殖を防ぐため、畦畔雑草や転作牧草などイネ科植物が出穂しないよう管理しましょう。

## 1 生育概況

6月25日に各農業改良普及センターが実施した水稻の一斉生育調査(23カ所、延べ33品種)の結果、県全体では草丈が35.4cmと平年より2.4cm低く、 $m^2$ あたりの茎数は397本と平年比96%です。葉数は7.9葉で平年より0.6葉少なく、葉数の進捗からみた生育は平年より4日程度の遅れと見込まれます。また、平年よりSPAD値が低く、葉色は全般に淡い(詳細は表1、2を参照)。

特に、低温寡照で経過している沿岸部の生育量(草丈・茎数)は内陸部に比べて小さい現状です。

表1 平成24年生育診断ほの地域別集計表(6月25日現在)各農業改良普及センター調べ

地帯名	草丈			茎数			葉数			葉色(SPAD値)	
	本年 (cm)	平年 (cm)	平年差 (cm)	本年 (本/ $m^2$ )	平年 (本/ $m^2$ )	平年比 (%)	本年 (枚)	平年 (枚)	平年差 (枚)	本年	平年
北上川上流	35.2	37.0	-1.8	379	372	102	7.6	8.1	-0.5	39.7	40.9
北上川下流	35.7	38.4	-2.7	410	425	96	8.1	8.7	-0.6	39.5	41.8
東 部	32.9	34.0	-1.1	349	410	85	7.8	8.7	-0.9	39.3	39.8
北 部	34.0	35.4	-1.4	338	432	78	7.3	7.5	-0.2	36.3	36.8
全 県	35.4	37.8	-2.4	397	413	96	7.9	8.5	-0.6	39.4	41.3

注: 平年値は原則として平成19年から23年までの5か年の平均値を用いた。

表2 平成24年生育診断ほの品種別集計表(6月25日現在)各農業改良普及センター調べ

品種名	草丈			茎数			葉数			葉色(SPAD値)	
	本年 (cm)	平年 (cm)	平年差 (cm)	本年 (本/ $m^2$ )	平年 (本/ $m^2$ )	平年比 (%)	本年 (枚)	平年 (枚)	平年差 (枚)	本年	平年
いわてっこ	34.9	35.7	-0.8	345	385	90	7.1	7.5	-0.4	36.1	37.0
あきたこまち	34.0	36.0	-2.0	364	377	97	7.8	8.4	-0.6	40.4	41.8
どんぴしゃり	36.1	38.3	-2.2	424	397	107	8.1	8.7	-0.6	38.1	39.8
ひとめぼれ	35.8	38.3	-2.5	416	449	93	8.2	8.9	-0.7	39.5	42.2

注: 平年値は原則として平成19年から23年までの5か年の平均値を用いた。

## 2 浅水管理の継続で分けつ促進（茎数がまだ不足している圃場）

平年に比べ茎数の増加はやや遅れていますが、既に目標茎数（目標とする穂数とほぼ同数）を確保した圃場もみられます。

茎数が不足している圃場では、浅水管理を継続し、分けつの発生を促しましょう。

## 3 中干しの徹底で根の健全化（茎数を確保した圃場）

目標となる茎数に達したところでは「中干し」を行きましょう。

### 中干しの効果

- ◇ 土壌の還元化をやわらげる→根の伸長促進・健全化
- ◇ 無効分けつの発生を抑える
- ◇ 地耐力の向上→秋作業の容易化

○中干しは、田面に小さな亀裂が生じ、軽く踏んで足跡がつく程度が目安。（7～10日間程度）

○中干しと同時に溝切りしましょう。排水を容易にし、収穫時の地耐力を高めます。

○中干し後、一度に深水にすると酸素不足となり根に障害が出る場合がありますので、中干し直後は間断かんがいとし、その後常時湛水としてください。

## 4 冷害回避のための水管理

東北地方の1か月予報（仙台管区气象台，6月22日発表）によると、ここ1ヶ月は平年と同様に曇りや雨の日が多い予報です。気温は、1週目（6/23～29）が平年より低い確率60%、2週目（6/30～7/6）は、平年並または高い確率がともに40%です。

これから水稻は低温に弱い時期を迎えますので、今から低温へ備える必要があります。

図1を参考に、気象条件にあわせた水管理により冷害を回避しましょう。

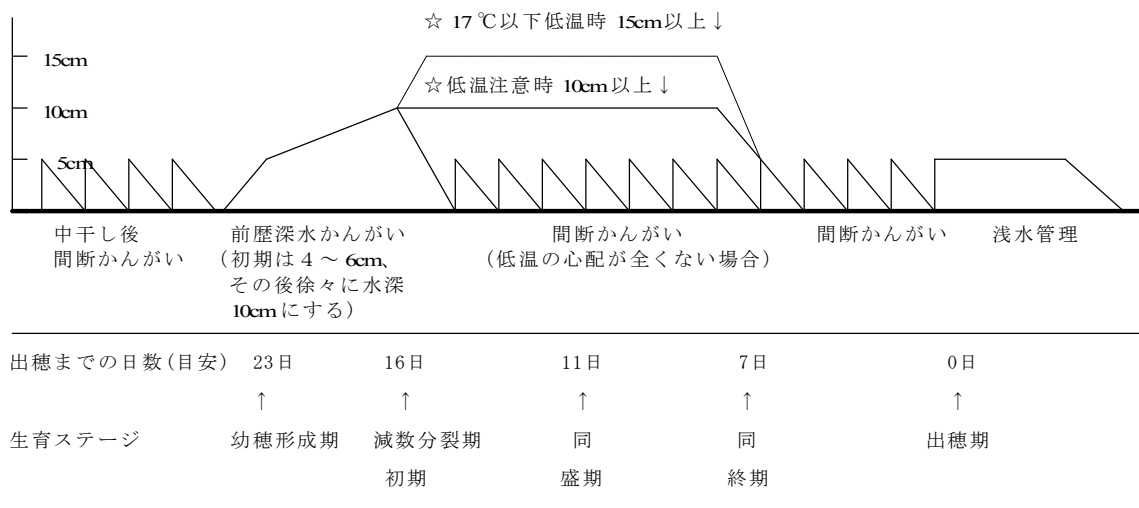


図1 中干し後の水管理の模式図

### ■ 幼穂形成期前後（前歴深水かんがい）

現在の生育は平年並であり、幼穂形成期も平年並と予測されます。

幼穂形成期の数日前から入水して幼穂形成期には4～6cmの深水にします（前歴深水かんがい）。幼穂を保護することで小孢子（花粉のもと）の分化が促進され、障害不稔を軽減できます。

※ 平年の幼穂形成期

いわてっこ：7月10日頃、 あきたこまち・ひとめぼれ：7月15日頃

## ■ 減数分裂期前後（深水管理の実施）

少しでも低温が予想される場合は、幼穂形成期の深水管理に引き続き、10cm以上の水深を確保してください。

17℃以下の低温が予想される場合は、15cm以上の深水としてください。

## 5 追肥

葉色は平年並に経過しています。追肥判断のため葉色の変化に注意が必要です。

良食味米生産の観点から、品種、気象・生育状況を見きわめて、適期に適量を施用しましょう。詳しくは各地域で発行される技術情報等を参考にしてください。

## 6 斑点米カメムシ類の防除対策

県病害虫防除所が実施した6月中旬の調査によれば、本年も畦畔や転作牧草のイネ科植物で斑点米カメムシ類が確認されています。

以下により、カメムシ類の増殖源となる畦畔等のイネ科植物の管理を徹底してください。

なお、養蜂活動が行われている地域で殺虫剤を散布する計画がある場合は、養蜂家と協議の上、散布時期を事前に通知するなど、ミツバチへの危害防止に努めてください。

### ■ 畦畔や転作牧草等のイネ科植物が発生源

斑点米の発生原因となるカメムシ類（アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ）は、畦畔や転作牧草等のイネ科植物で繁殖します。

### ■ 水稲出穂の15～10日前までに地域一斉に草刈りを実施

畦畔雑草は水稲が出穂する15～10日前までに地域で一斉に刈り取ってください。

### ■ 水田内の雑草も増殖源となる

水田内にノビエ、イヌホタルイやシズイなどの雑草が多発している圃場では、これらの雑草がカメムシの発生源となりますので、水田内の除草に努めてください。



図2 アカスジカスミカメ成虫



図3 畦畔雑草管理は地域一斉に

## 7 いもち病防除

### (1) 葉いもち

いもち病は気象条件により急激に広まるので、圃場の観察と早期防除を徹底してください。

圃場をよく観察し、発生を確認したら、葉いもち予防剤（箱施用剤、水面・投げ込み施用剤）施用の有無にかかわらず、直ちに茎葉散布を実施しましょう。

## (2) 穂いもち

穂いもち対象の予防粒剤を散布する場合は、次の点に留意してください。

- ・ 水稲の生育状況に注意する（散布時期を逸さない）
- ・ 圃場をよく見回り、葉いもちが発生していたら直ちに茎葉散布してから粒剤施用する。
- ・ ストロビルリン系薬剤（嵐剤、オリブライト剤、アミスターエイト）は耐性菌の発生リスクが高いので、嵐剤を箱施用した場合は、オリブライト剤を本田では使用しない。

次号は7月26日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

**6月1日～8月31日は  
農薬危害防止運動期間です**

- 近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
- 農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう
- 農薬の保管・管理は適切にしましょう